

ダニエルの書 - 第百六十八番

預言的真理を解き明かす——代理戦争の第二の戦いと十四万四千人の封印

Jeff Pippenger

2024-03-30

私たちは今、ダニエル書第十一章十一節および十二節に描かれている代理戦争の第二の戦いを扱っている。これらの節における第二の戦いは、無神論的勢力であるロシアと、ウクライナの国との間の戦争を示している。その節においては、プーチンはプトレマイオス四世がそうであったように勝利するが、その勝利の後、彼は自らの心のうちに高ぶり、その自己愛的な自己高揚が彼のワートルローの手段となる。この現在の歴史に対する歴史的表象は、現在の歴史が霊的に何を表しているのかを理解する者にとってのみ有益である。

第10章の第1節で、神の終わりの時の民を代表するダニエルは、「vision」と「thing」の両方を理解していると示されている。そのvisionとthingは、繰り返し共に示されるが、一つの真理の系列として互いに区別されている。すなわち、それはウライ川とヒッデケル川であり、「mareh」と「chazon」という幻であり、二千五百二十年の預言と二千三百年の預言とが結びついたものであり、神の民の内なる証しと外なる証しである。主は重要でない事柄を繰り返されることはない。初出の法則はこれを示している。すなわち、ダニエルの最後の幻で私たちが最初に知らされるのは、彼が「chazon」と「mareh」の双方を理解する神の終わりの時の民を代表しているということである。ゆえに、11節と12節の預言的歴史を正しく理解するためには、その「vision」と「thing」を見ることが不可欠である。

ダニエルは、黙示録十一章における十四万四千人を象徴しており、彼らはミラー派の歴史において成就した十人の乙女のたとえを完全に再現した。彼らはミラー派と同様に第一の失望を味わったが、そのことは黙示録十一章では、底知れぬ淵からの無神論的な「woke」の獣に殺されることとして表され、さらに、キリストも十字架につけられた、エジプトとソドムという大いなる都の街路に死んだまま横たわる者たちとして描かれている。彼らの死は竜に従う者たちには「喜び」をもたらしたが、ダニエルには嘆きをもたらした。

十四万四千人の封印の歴史は、ラザロの復活によっても表象されていた。ラザロの復活は、キリストの働きの封印の行為として同定されており、また、キリストが封印される者たちの象徴としてのラザロは、エルサレムへの凱旋入城を先導したが、これはミラー派の歴史における真夜中の叫びの運動、そしてまた十四万四千人の歴史におけるそれを予表していた。ラザロの復活は、彼の姉妹マリヤとマルタが嘆きのうちにあった間に起こったが、それは第十章における二十一日間のダニエルの場合と同様である。第十章において、ダニエルの嘆きはミカエルの降臨によって終わるが、そのミカエルこそ、その「声」によってラザロとモーセを生命へと呼び戻したまさにそのお方である。黙示録十一章における二人の証人の復活は、「marah」の因果的幻によってダニエルが変貌させられることによって表象されている。

第十章において、ダニエルは、黙示録第十一章にも示されている十四万四千人の封印を表している。その章において、ガブリエルは、自分がダニエルのもとに来たのは、神の終わりの時代の民に何が臨むかをダニエルに悟らせるためであったと明言している。終わりの日に神の民に何が臨むかというこのメッセージは、預言の線に預言の線を重ねるという方法論によって確証される一つのメッセージの文脈の中に、預言的に置かれている。その適用の中で、初出の法則は、結び合わされる線の中にある内的真理と外的真理の双方を見る者たちによってのみ、正しい理解が認められることを示している。彼らこそ、「幻」と「その事」とを理解する者たちである。

十四万四千人は預言的メッセージを理解するだけでなく、そのメッセージをも体験する。というのは、メッセージと体験は切り離すことができないからである。聖化をもたらすのはメッセージである。なぜなら、そのメッセージは神の言葉であり、キリストは神の言葉であり、神の言葉は真理だからである。彼のメッセージが真理として確証されるのは、それが預言的適用の原則を通して表現されており、その原則が、彼の存在と本質をなす原理そのものに他ならないからである。彼はパルモニ、不思議な数える方、秘められた事柄を数える方である。彼は驚くべき言葉の使い手、初めであり終わり、最初であり最後、アルファでありオメガである。彼がいかなる方であるかというこれらの要素こそが、預言のメッセージを確立し、預言の体験を生み出す預言の規則を規定するのである。

シナルの二つの大河、すなわちウライとヒデケルは、ペルシア湾に至る前、その合流点の近くでシャット・アル＝アラブと呼ばれる湿地帯を形成するが、単一の川に合流するわけではない。シャット・アル＝アラブは、ユーフラテス川とティグリス川、ならびにいくつもの小河川や水流の合流によって形成される三角州である。しかし、この三角州地域の内部においてさえ、ユーフラテスとティグリスはそれぞれの独自性を保ちつつ、別個の川としてペルシア湾に流れ込む。預言の内的メッセージと外的メッセージもまた、その区別された関係を保っているが、それらがその結末（終わりの日）に達するに及んで、いくつもの寄与する河川と水流を伴う三角州を生み出す。イエスは自然なものをもって霊的なものを例証されるのであり、終わりの日には、あらゆる幻の効果が三角州の氾濫地を形づくるが、二つの大河はなおそれぞれの固有の役割を保ち続ける。

二十一日の嘆きの期間は、二人の証人が街路に死んでいる期間と一致しており、その期間は最初の失望と遅延の時をもって始まる。その期間は、十四万四千人の印が完了する、より大きな期間の内側に生じるものである。印する働きは、1989年の終わりの時に始まったのではなく、キリストが第三の天使として2001年9月11日に降臨された時に始まった。キリストは御自分の民をカデシュへの二度目の訪れへと導かれ、そして今回は、備えのできている少数の者たちが約束の地に入るのである。1989年の終わりの時から2001年9月11日に至るまでの神の民の経験は、彼らに印を押すものではなかった。印する働きは、キリストが降臨し、第三の災いの第七のラッパの第一の音を鳴らされた時に始まったのである。

第七のラッパが鳴ることにおいて、神の奥義は成就されるのであり、その奥義は十四万四千人の封印を表している。そしてそのことは、そのラッパの響きの間に起こる。そのラッパは三つの音を発する。なぜなら、それは真理だからである。第一の音は2001年9月11日、第二の音は2023年10月7日であり、その三つの音の第三は、まもなく到来する日曜法に

おいてである。これら三つの音は、真理のうちに常に存在する三つの段階である。第十章におけるダニエルへの三度の接触は、彼の経験を、第七のラッパの三つの音によって表される歴史の時期に結びつけた。

キリストの御姿へと変えられるという効果を生み出す預言的メッセージは、ダニエル書10章でダニエルが示しているように、終わりの日に神の民に何が起こるかについてのメッセージである。ただし、ここでいう終わりの日は一般的な意味でのものではない。それは、十四万四千人の封印の時に、神の民が理解し、体験するメッセージである。

ガブリエルが第十一章に示されている預言的歴史を提示し始めるにあたり、彼は預言の特定の系統を示す。最初の二節は、終わりの時である1989年におけるキュロス（最初のブッシュとして）から始まり、第四十五代大統領であるドナルド・トランプ（第六の者）の歴史に至るまで進み、そこでその預言的歴史はいったん終息する。その後、第七の王国としての国際連合（アレクサンドロス大王）の歴史が、三節と四節において取り扱われる。それゆえ、グローバリストたちを奮い立たせる、富める第六の大統領としてのドナルド・トランプのメッセージは、十四万四千人の封印の時に成就する真理である。したがって、それは現代の真理である。

五節から九節においては、教皇制が五三八年に王座の上に स्थापितされてから、致命傷、そして一七九八年の終わりの時に至るまでの歴史が述べられている。これはもちろん、四十節を支持し確認するものであるゆえに、本質的かつ重要な真理である。しかしそれは、十四万四千人の印する時期に起こる、いかなる特定の預言的叙述をも提示してはいない。十節もまた、五節から九節と同様に、四十節の正当性を確認しているが、印する時の間に成就する預言の歴史を扱ってはいない。しかしながら、それは一九八九年を画し、したがって、省略によって、一九八九年から四十一節の安息日法に至るまでの沈黙の期間を確立している。

十一節から十五節は、十四万四千人の封印の時期に成就する歴史を明らかにしている。これらの節は、二節と三節の間にある隠された歴史、また四十節における一九八九年と四十一節における日曜法との間に位置している。これらの節はまさに現代の真理であり、もし私たちがそれらの節を理解することによって意図された益を刈り取ろうとするなら、それらをそのようなものとして認識しなければならない。

意図された益は二つある。すなわち、そこに示された予言的歴史の理解と、そのメッセージの真理を理解することによって生み出される経験である。そのメッセージの理解、すなわち封印の期間に成就しつつある知識の最終的な増加こそが、十四万四千の中に数えられる者たちを聖める。このため、これらの聖句を内的・外的な視点から考察することが重要である。

レビ記二十六章の「七つの時」は、十四万四千人の封印の時に絶対的に属している。なぜなら、二章と九章に示されているダニエルの二つの祈りは、獣の像によって表される預言的歴史を理解するための二重の祈りを表すとともに、自分たちの罪と先祖たちの罪の赦しを求めるレビ記二十六章の祈りを成就する者たちによって生み出される経験を受け取るための祈りをも表しているからである。外的な祈りは獣の像を明らかにし、内的な祈りはキリストの像を生み出す。

封印の時に成就する歴史を特に扱うダニエル書11章のさまざまな箇所描かれた歴史の理解は、2章に記されたダニエルの祈りによって象徴されている。彼と三人の勇士は、金属の像に関するネブカドネザルの夢の奥義を解き明かそうとした。ネブカドネザルの隠された夢に表された預言的歴史が正しく理解されると、その理解は、それを理解した者に、自らがダニエル書9章の祈りに表されている完全な悔い改めの経験を個人的に成し遂げないかぎり、自分には希望がないことを示す。

第十章においてダニエルによって表象されている経験を、第十一章における終末時代の諸事件の預言的叙述から切り離すことは、預言の学徒として失敗することである。ダニエル書第十一章十一節と十二節において、国境地帯の戦争、すなわちラフィアの戦いと南の王の勝利は、神の預言の御言葉に記されている三つの代理戦争のうち第二のものを表している。この真理の啓示を視野に入れさせる鍵は、第十節において、すばらしい言語学者が北の王について「溢れ越え、通り過ぎて、要害（首）にまで及ぶ」と用いておられることである。主はさらに、溢れ越え、通り過ぎることに言及する他の二つの節を備えられ、そのことによって、出来事の預言的叙述と、それらの出来事の理解が生み出すべき経験とを結び合わせておられる。

しかし、彼の子らは奮い立って大いなる軍勢を集める。そのうちの一人が必ずや来て、氾濫し、通り抜ける。のちに彼は引き返し、再び奮い立って、要塞にまで攻めかかる。南の王は怒りに燃えて出陣し、北の王と戦う。北の王は大軍を繰り出すが、その軍勢は南の王の手に渡される。彼がその大軍を打ち破ると、彼の心は高ぶり、幾万もの者を打ち倒す。しかし、それによって彼は強くはならない。ダニエル書 11章10-12節。

2014年、プーチンはウクライナにおいて戦争を開始した。そして、これを第十一章十一節に表象されている真理として認識するためには、預言の学徒はまず、第十節がダニエル書第十一章四十節の後半を例証する歴史を表していることを見て取ることができなければならない。それを認識するとき、彼らは次に、第十節が四十節に付け加えていること、すなわち、1989年にソビエト連邦が一掃されたとき、北の王はその要害（「首」）にまで上ったにすぎなかったことを見るのである。しかし、預言の学徒は、イザヤ書第八章八節を見るまでは、それが何を示しているのかを知ることはできない。そうして初めて、彼は、これら三つの節が、聖書においてただ三度しか用いられていない一つの表現によって結び付けられていることを特定する預言的権威を持つのである。

そのとき学ぶ者には、「あふれ越えて進む」という表現が聖書中に三度現れることが、意図的な反復であるという第二の証人が必要となる。この事実に対する第二の証しは、その三つの節（証人）がすべて、北の王が南の王を攻撃することを示していることによって確立される。こうして、二種類の内的証人によって同一の象徴的歴史であることが確認された三人の証人は、預言を学ぶ者をして、線の上に線を加える方法で、その三つの節を互いに重ね合わせるよう導く。その適用は、北の王と南の王との戦いを描くそれらの節の内容を拡張する。

イザヤ書七章八節と九節は、十節にある「要塞」が何を意味するのかという謎を解く鍵を与えている。というのも、「要塞」に当たるヘブライ語は、十一章七節で南の王が入った「要塞」でもあるからである。さらに、「要塞」はダニエル書十一章三十一節の「力の

聖所」という表現では「力」とも訳されている。したがって、この二つの節（七節と三十一節）は、「要塞」が王国の首都、あるいは王を指すことの二つの証言となる。この事実が（二つとも十一章にある）二つの証言によって確立されたなら、イザヤ書七章八節と九節の謎めいた記述が、内部の二つの証言によって、要塞が王国の首都、またはその王であることを示しているという点から、1989年以前、ソビエト連邦（その首都はロシアで、その首都の都市はモスクワであった）には、その長としてミカル・ゴルバチョフがいたことが確立される。ゴルバチョフの外見的特徴が額であったのは偶然ではない。

行に行を重ねて、この適用の結論は「もしあなたがたが信じないなら、必ず堅く立つことはできない」と言って、その重要性を強調している。イエスは言われた。「ああ、愚かで、預言者たちが語ったすべてを信じるのに心の鈍い者たちよ。」[ルカ 24:25 参照] エズラはこう書いた。「彼らは朝早く起き、テコアの荒野へ出て行った。出て行くと、ヨシヤファトが立って言った。『ユダよ、またエルサレムの住民たちよ、私に聞け。あなたがたの神、主を信じなさい。そうすれば、あなたがたは堅く立つ。彼の預言者を信じなさい。そうすれば、あなたがたは栄える。』」[歴代誌下 20:20 参照] 黙示録では、聞けという命令が七度与えられている。「耳のある者は、御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」

堅く立つとは、賢いおとめたちの中にあることだ。愚か者は心が鈍く、預言者たちを信じるのに鈍いからである。賢い者は、神がご自身の預言者たちを通して語られたことを信じ、御霊が諸教会に言われることを聞くので、堅く立ち、栄える。キリストがまさにその真理の封印を解かれる時期に、預言を賢く学ぶ者たちを堅く立たせるのは、ロシアを識別することと、ロシアが2014年にウクライナに対して始めた戦争である。

その真理は、2001年の後に当たる2014年に歴史の中へ到来し、したがって十四万四千人の印を押す時の内部に位置している。翌年の2015年には、1989年の終わりの時から数えて第六代の大統領である最も富裕な大統領が、グローバリストたちをかき立て始めた。第十節は1989年の歴史を特定しているが、同時にロシアを「要塞」として確立しており、続く二つの節において、ロシアは代理戦争の第二の戦いを開始し、プーチンはその戦いに勝利することになる。これらの節の真理は、それが表象している歴史が成就するときを開封される。

ダニエルは自分の受ける分とその場所に立っている。ダニエルとヨハネの預言は理解されるべきである。それらは互いに解き明かし合う。すべての人が理解すべき真理を世界にもたらしめている。これらの預言は世界において証しとなるべきものである。この終わりの時代にそれらが成就することによって、それ自体が解き明かされる。クロス・コレクション、105。

十一節と十二節の預言は、十四万四千人の封印の時におけるその歴史的成就によって解き明かされるが、「継ぎに継ぎ」ながら、これらの節に関連するもう一つの重要な事実がある。「あふれ、かつ越え行く」に関する三つの箇所を一つに結び合わせるためには、預言を学ぶ者はまた、六十五年の預言をもその預言の線の中に取り入れなければならない。六十五年の預言は、二つの二千五百年の預言の始まりを画するものであり、それらが互いに四十六年隔たって始まることを示している。初めにおいて六十五年を特定する

ことによって、それはまた、終わりにおいてアルファとオメガが六十五年を生み出すことをも示している。

初めと終わりにおける六十五年は、いずれも三つの道標の刻印を有している。最初は紀元前742年、次いで十九年後の紀元前723年、さらにその四十六年後の紀元前677年であった。これら三つの道標は、終わりにおいて1798年、1844年、1863年として表されている。初め（アルファ）における四十六年の期間は、神殿とその軍勢が踏みにじられることを表し、終わり（オメガ）における四十六年は、契約の使者（この方はまたアルファにしてオメガでもある）が、1798年から1844年までの四十六年の間に御自身が建て上げられた神殿の中に突如として入られる時、聖所とその軍勢の回復を表している。

紀元前742年にイザヤがその預言を示した時期において、十九年が先行する四十六年は、その終わりに十九年が続く別の四十六年をも表しており、キアズム的なパターンを成している。1844年から1863年までの十九年間は、その時代に起こった反逆のために成就しないまま残された、十四万四千人に対するキリストの御意志を示す一つの例証となっている。ダニエル書11章10～12節について真理の言葉を正しく取り扱うために預言の学徒に求められる働きは、（もしあなたが信じるなら）ロシアが2014年にウクライナで戦争を開始することを確認するだけでなく、その戦争が十四万四千人の封印の時に開始されることも確認している。これらの節に表されている預言史が重要であると同様に、その預言の真理が封印を解かれて明らかにされる歴史も、1844年から1863年の十九年の歴史によって表されている。

1844年は第三天使の到来を示しており、またそれは、2001年9月11日における第三天使の到来を予表している。1863年は、エリコの再建によって象徴される反逆を表している。1863年という道標はまた、間もなく到来する日曜法において、「エリコの城壁を打ち倒す」ために用いられる十四万四千人の従順をも予表している。私たちが考察しているこれらの節において、第十六節は合衆国における日曜法を表している。第十一節は、2014年からプーチンの最終的勝利に至るまでを示している。これらの節は、第二の代理戦争の始まりを示しており、その後には、第十三節から第十五節に示されているとおり、第三の代理戦争が続く。

第二節を第十一節および第十二節と併せて考えると、私たちは、2014年に始まったウクライナ戦争を特定し、それに続いて2015年の米国大統領選挙運動、さらにその後、2016年に最も富裕な大統領が選出されたことを認める。第十二節に続くのは、日曜法の前の最後の大統領による、第三の代理戦争における報復である。国境線の戦いである第二の代理戦争は、第六代にして最も富裕な大統領の選出の直前に始まった。

1844年から1863年にかけての歴史において、エゼキエルの二本の棒は一つに結び合わされるはずであった。その結合は神性と人性の結合を表しており、これは十四万四千人を封印する働きである。1844年に第三天使が到来し、天の聖所、神の律法、安息日、そして第三天使に関する光の封印を解いた。1849年、主は再び御手を伸ばされ、大失望によって散らされてしまった群れを集めようとされた。1850年には、主はご自分の民を導いてハバククの第二の図表を準備させ、彼らを「エリコの城壁を打ち倒す」へと導かれる過程で、民が宣べ伝えるべきメッセージを視覚的に示させた。その図表には「七つの時」が含まれ

ており、「古い図表」と同様であった。

1856年、彼は「エリコの戦い」に先立って、ご自分の民に印をするはずの光の封印を解いた。その光は、アルファとオメガがウィリアム・ミラーに啓示した最初の光の増し加わりであった。それは、古代のエリコの戦いにおいて繰り返し表されている「七つの時」の光であった。ご自分の民に印をするはずのその光は、彼らを目覚めさせ、再びフィラデルフィアの経験へと戻すためのラオデキアのメッセージでもあった。その最後の光は最初の光の増し加わりであったが、ご自分の民はその光をないがしろにし、結果としてラオデキアの荒野をさまようことを選んだ。1844年、1849年、1850年、1856年、1863年は、2001年9月11日から間もなく来る日曜法に至るまでの歴史においても示されている五つの道標を成している。

次の記事でこの研究を続けます。

さて、エリコはイスラエルの子らのゆえに、堅く閉ざされていた。だれ一人出る者もなく、だれ一人入る者もなかった。主はヨシュアに言われた、「見よ、わたしはエリコとその王、また勇士たちを、あなたの手に渡した。あなたがた戦う者はみな町を巡り、その町の周囲を一度回らなければならない。このようにして六日の間行いなさい。七人の祭司は箱の前で七つの雄羊の角笛を携え、七日目には町を七たび巡り、祭司たちは角笛を吹かなければならない。そして、彼らが雄羊の角で長く吹き鳴らし、あなたがたがその角笛の音を聞くとき、民はみな大声で叫ばなければならない。そうすれば町の城壁はくずれ落ち、民はおのおの自分の真正面に向かって上って行くであろう。」そこでヌンの子ヨシュアは祭司たちを呼んで彼らに言った、「契約の箱を担ぎ上げなさい。七人の祭司は主の箱の前で七つの雄羊の角笛を携えなさい。」また民に言った、「進んで町を巡りなさい。武装した者は主の箱の前を進みなさい。」ヨシュアが民に告げると、七つの雄羊の角笛を携えた七人の祭司は主の前を進み、角笛を吹いた。主の契約の箱はそのあとに従った。武装した者たちは角笛を吹く祭司たちの前を進み、しんがりは箱のあとに従い、祭司たちは進みながら角笛を吹いた。ヨシュアは民に命じて言っていた、「あなたがたは叫んではならない。声を立ててもならない。あなたがたの口からは一言も出してはならない。わたしが『叫べ』と命じるその日までそうしなさい。そのとき、あなたがたは叫ぶのである。」

こうして主の箱は町を巡り、一度これを回った。彼らは宿営に戻って、宿営の中に宿った。ヨシュアは朝早く起き、祭司たちは主の箱を担いだ。主の箱の前には、七本の雄羊の角笛を持った七人の祭司が絶えず進みつつ角笛を吹き、武装した者たちは彼らの前を進んだ。しかし、しんがりの者たちは主の箱の後に続き、祭司たちは進みながら角笛を吹き続けた。第二日にも、彼らは町を一度巡って宿営に戻った。このようにして六日間行った。七日目になると、夜明けごろ朝早く起き、同じ方式に従って町を七度巡った。その日だけは、町を七度巡ったのである。七度目に、祭司たちが角笛を吹いたとき、ヨシュアは民に言った。「ときのをあげよ。主がこの町をあなたがたに与えられたからである。」

その町は、その中にあるすべてのものとともに、主にささげられたものとしてのろわれる。ただし遊女ラハブだけは生きることができる。彼女と、その家にいるすべての者もそうである。彼女が、われわれの送った使者たちを隠したからである。あなたがたは

、必ずその、のろわれたものから身を守りなさい。あなたがたが、その、のろわれたものを取って、自らをのろわれたものとし、イスラエルの宿営をのろいとして、それを悩ますことのないためである。しかし、銀も金も、青銅と鉄の器もすべて、主に聖別されたものである。それらは主の宝物庫に納められなければならない。そこで、祭司たちがラッパを吹くと、民は叫んだ。民がラッパの音を聞き、大声で叫んだそのとき、城壁はその場に崩れ落ちた。そこで民は、おのおの自分の前方へまっすぐ進んで町に上り、これを取った。

彼らは町の中にいたすべてのもの、すなわち男も女も、若い者も老いた者も、牛も羊もろばも、ことごとく剣の刃にかけて滅ぼした。だがヨシュアは、その地を探った二人の者に言っていた。「遊女の家に入り、あなたがたが彼女に誓ったとおりに、その女と、彼女に属するすべてのものを、そこから連れ出さなさい。」そこで斥候であった若者たちは入って行き、ラハブとその父、その母、その兄弟たち、また彼女に属するすべてのものを連れ出した。彼らはまた彼女一族をみな連れ出し、イスラエルの宿営の外に置いた。そして彼らはその町と、その中にあったすべてのものを火で焼いた。ただし銀と金、青銅および鉄の器は、主の家の宝物庫に納めた。ヨシュアは遊女ラハブとその父の家族、また彼女に属するすべてのものを生かしておいた。彼女は今日に至るまでイスラエルの中に住んでいる。ヨシュアがエリコを探らせるために遣わした使者たちを、彼女が隠したからである。ヨシュアはその時、彼らに誓わせて言った。「主の御前にあって、立ち上がってこの町エリコを再建する者はのろわれよ。その者は長子をもってその基を据え、末の子をもってその門を建てるであろう。」こうして主はヨシュアとともにおられ、その名声は全地に広まった。ヨシュア記 6:1-27.